

グリフィスと『雪の花』

当館はグリフィス居館の外観復元建築ですが、居館の跡地に立っているわけではありません。玄関前の道路（片町商店街と桜橋を結ぶ南北の道）を東に横断して徒歩数分のところに、「異人館跡」を示す石碑があります。その一帯は武士身分が住む福井城外郭内で、「異人館」が南面していた足羽川は、お城の南の外堀の役割を果たしていました。今は跡形もない西の外堀に沿っているのがグリフィス館玄関前の道路ですから、当館の立地は旧藩時代には城門（現在の片町入口交差点あたり、桜門）を出てすぐの民間人居住区、すなわち城下町の旧町名で言う「浜町（はままち）」です。この町に住んでいた町医者が、公開中の映画『雪の花 -ともに在りて-』の主人公、笠原良策です（配役：松坂桃李さん）。地元福井では「笠原白翁」の名で一般に知られています。「白」は *vaccin* の *vac*、すなわちワクチンが由来です。幕末に北陸のワクチン接種のパイオニアとなった人物の苦闘を、映画は描いています。

グリフィスの来日は映画の時代の二十年後ですが、良策は健在でした（数え 63 歳。妻の知於は 54 歳）。すでに後継者（実弟で養子の浜人、43 歳）もいましたが、浜人の娘たちや、良策のまだ幼い四男格（いたる、14 歳）が近所の米国人教師の家を訪ねて来ている様子は、その教師の日記からうかがえます（沖久也「グリフィスの福井日記中の福井人の同定について」）。グリフィスは笠原格少年を *Karl* と呼んで可愛がりました。当初武家屋敷に仮住まいしていた外国人教師のための、西洋式の新築住宅が（異人館跡碑の場所に）完成して引っ越した後、グリフィスは数名のこどもたちを同居させていますが、その中にカールもいたようです。その後、グリフィスは東京の開成学校の教師となり、カールも入校しました。グリフィスが浅草の写真館で福井時代の生徒と撮影した集合写真の中に、カールの姿もあります（グリフィスの右下の羽織の少年。当館ウェブサイト「*W.E.Griffis*」のページに掲載）。

開成学校時代のカールのエピソードをひとつ。グリフィス帰国後の 1876（明治 9）年の米国の新聞に、開成学校で行われた野球の試合の記事が、スコア、出場選手の姓と共に掲載されています。外国人チームと日本人チームの試合で、外国人は外交官や学校教師、その中に「日本野球の祖」として知られるウィルソンの名もあり、日本人はウィルソンたちに野球（と学校の教科）を教わった開成学校の生徒たちです。当時の学校生徒の名簿は残されており、新聞記事の姓と符合する名前を概ね推定できます。四番センター *Kusahorra* はカールと同定してよいと思います。この試合は京浜在住米国人たちが野球チームを結成し、その手始めに教え子と対戦したものですから、記録に残る最初の日米野球であり、いわば初代侍ジャパンの四番打者として笠原格をご紹介できる史料と判断しております（当館ウェブサイト掲載「サムライジャパンの大学校」参照）。

最初期の野球少年として、中澤岩太（上記写真でグリフィスの左下の少年）、青山元（上記試合の三番打者と推定）、佐々木忠次郎（同九番打者）ら福井の少年たちの名を多く挙げ

ることができるのは、開成学校という当時の日本を代表する洋学校（上記試合の翌年に東京大学に改編）に多くの生徒を送り出すことができた、幕末福井藩の洋学教育、およびグリフィスをはじめとする外国人教師の存在あってのことでしょうが、福井藩の洋学教育の先進性を語る時、決して忘れることができないのがカールの父、笠原良策の事績です。

映画では、大変な苦勞をしながらやっと痘苗を福井にもたらすことができた良策に対し、町の人たちが西洋の妖術など信用できないとあって接種を拒み、こどもたちが良策に石を投げるシーンがあります。これは当時の実情で、民間ボランティアによる先端医療行為を敵視する、換言すれば既得権益と威信を守ろうとする福井の伝統医療業界の誹謗中傷がひどかったことは、映画にも登場する名君春嶽公の懐刀中根雪江の筆が証言するところです。種痘は接種者が継続的にいなければワクチンが絶えてしまいますから、これはたいへん危機的な話で、全国の先駆者たちを絶望に追いやる要因でした。福井藩の場合、事情を理解した中根が、役人の消極性を克服すべく、信頼する石原甚十郎という硬骨漢に種痘事業の監督権限を委ね、石原の差配により福井の種痘は官民の医師を動員する組織的事業の実を備え、ボランティア頼みの苦境をようやく脱します（事業に参加した医師の中に橋本左内もいます。左内は後に、笠原から痘苗の分与を受けた大坂の医師緒方洪庵の元で学んでいます）。

映画が描く時代から約二十年後に福井にやってきた米国人化学教師を、誰も妖術使いのキリシタンとは呼びませんでした。誹謗中傷など無く、武士も町の人たちもみな彼を温かく迎え、こどもたちもよくなつき、グリフィスも藩校の授業だけでなく、ボランティアの課外授業にいそしみました。何人もの少年がグリフィスと同居し、グリフィスは自宅でクリスマスパーティーまで開いています。キリスト教がまだ全国で禁じられていた時代に、多くの人々が招かれ、心から楽しんでいました。重ねて申しますが、この信頼関係は、カールの父を追い詰めた社会の西洋不信から、たった二十年後の姿です。その二十年間に何があったのか。

天然痘は悪魔の如き伝染病でした。種痘事業の定着により、福井の人々はその悪魔から逃れる道を知りました。その道を提供したのは「西洋」「洋学」でした。免疫の獲得という、厳然たるエビデンス、その積み重ねの時間が、西洋とはむやみに恐れる対象ではなく、学ぶべき世界であることを福井市民に理解させ、グリフィスを迎える福井の人々の笑顔と、幸福な交流の日々を準備したのです。

妻と協力者の支えがあったとはいえ、先駆者笠原良策の孤独は想像を絶するものです。この私心なき民間人医療者の勇気と不屈の精神がなければ、「福井市グリフィス記念館」など今日存在し得たでしょうか。最初に申しました通り、当館はグリフィス旧居の跡地にあるわけではありませんが、立地する「浜町」こそ笠原良策が暮らし、自ら最初の種痘所を設けた場所であることを思いますと、誠にふさわしい場所にあるのではないのでしょうか。「笠原白翁なくして福井のグリフィスなし」。そんな認識と先人への敬意をもって、映画への便乗に終わることなく、グリフィスの顕彰を続けて参ります。